

[11]

氏名	西岡 麻衣子
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第37号
学位授与の日付	2023年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	集団間接触理論に基づいた異文化間協働学習がもたらす教育的効果と自己変容の過程 —異文化間能力を育む協働学習のデザイン構築に向けて—
論文審査委員	主査教授 守崎 誠一 副査教授 嶋津 百代 副査教授 竹内 理 副査 名誉教授 八島 智子 専門審査委員 教授 浅井 亜紀子 (桜美林大学)

論文内容の要旨

西岡麻衣子氏の博士学位請求論文「集団間接触理論に基づいた異文化間協働学習がもたらす教育的効果と自己変容の過程 —異文化間能力を育む協働学習のデザイン構築に向けて」は、以下の4部構成で10章から成り立っている。

第 I 部 本研究の導入

第1章：序章

第2章：文献レビュー

第3章：研究課題と研究のコンテキスト

第 II 部 集団間接触理論に基づく異文化間協働学習の教育的効果の検討

(量的研究)

第4章：異文化間能力の変容から見る教育的効果の検討：第1研究

第5章：「偏見につながる心理」の変容から見る教育的効果の検討：第2研究

第6章：第1研究と第2研究のまとめ

第 III 部 集団間接触理論に基づく異文化間協働学習における変容過程の解明

(質的研究)

第 7 章：日本人学生と留学生の自己変容過程－探索的包括モデルの作成－

第 3 研究

第 8 章：第 3 研究のまとめ

第 IV 部 総括

第 9 章：総合考察

第 10 章：教育的示唆と研究の課題

参考文献、206 編

付録 (1～4)

近年、日本の大学において留学生と日本人学生の交流・協働学習が推進されている。しかし、実践先行の傾向にあり、理論面および教授法の開発が立ち遅れている現状を受け、本博士論文においては、その解決のために、混合研究法を用いて、集団間接触の理論に基づいた協働学習がもたらす教育的効果と自己変容過程を探求する。その上で、異文化間能力を育む協働学習のデザイン構築に向けた教育的示唆の提示を試みたものである。

第 1 章では、上記の背景と現状を述べた上で、本博士論文における研究の目的として、次の 3 点を挙げている。1) 留学生と日本人学生がともに学ぶ国際共修科目を対象として、集団間接触理論に基づく異文化間協働学習を実施し、教育的効果を検討する。2) 留学生と日本人学生がどのような相互作用を経験しながら意味付けを行っているのかを、参加者個々人の内的視点から探り、自己変容過程を解明する。3) 研究成果をまとめ、異文化間能力を育む協働学習のデザイン構築に向けた教育的示唆を提示する。

第 2 章では、文献レビューを行なっている。まず本研究における協働学習の理論的枠組みとなるオルポートの接触仮説（一定の条件を満たした場合、異文化間接触が偏見の低下に結びつくとする仮説）と、後続のカテゴリー化変容モデルや、偏見の低下に結びつく条件について提案された理論について詳しく述べている。次に、分析の主な観点となる異文化間能力と偏見につながる心理（不安・不確実性・接近回避・自民族中心主義）についてレビューしている。最後に協働学習の先行研究についても検討し、協働学習の理論的枠組みとして接触仮説の有効性は示唆されているが、変容プロセスを解明した研究は見当たらず、集団間接触理論の効果の検討と変容過程の構造を読み解く研究が求められる、と研究の必要性を明確にしている。

第 3 章では、研究が行われたコンテキストである大学における異文化間共修の教育内容、特に日本人学生と留学生が協働で行うグループワークの詳細を紹介し、リサーチクエッション(RQ)を提示している。第 1 章で設定した目的 1) について、量的研究 1 と 2 を行うとし、第 1 研究では、異文化間能力の変容から見る効果の検討をするため以下の RQ を立てている。

RQ1： 接触仮説とその発展理論に基づきデザインされた異文化間協働学習は参加者の異文化間能力を促すか。

RQ2： 接触仮説とその発展理論に基づきデザインされた異文化間協働学習は留学生と日本人学生に異なる影響を与えるか。異なる場合それはどのようなか。

第2研究で偏見につながる心理の変容からみる効果の検討をすることを述べ、以下のRQを立てている。

RQ3： 接触仮説とその発展理論に基づきデザインされた異文化間協働学習は参加者の偏見につながる心理を促すか。

RQ4： 接触仮説とその発展理論に基づきデザインされた異文化間協働学習は留学生と日本人学生に異なる影響を与えるか。異なる場合それはどのようなか。

以上の量的研究に加え、目的2)の異文化間協働学習における変容過程の様相の解明については、質的研究を行うとしている。第3研究として参加者の自己変容過程の探索的包括モデルの作成を試みるとし、以下のRQを立てている。

RQ5： 接触仮説とその発展理論に基づきデザインされた異文化間協働学習における日本人学生の自己変容プロセスはどのようなか。そして、それはどのような共通性と多様性があるか。

RQ6： 接触仮説とその発展理論に基づきデザインされた異文化間協働学習における留学生の自己変容プロセスとはどのようなか。そして、それはどのような共通性を多様性があるか。

RQ7： RQ5とRQ6から得られた日本人学生の自己変容プロセスと留学生の自己変容プロセスにはどのような共通点と相違点があるか。

第4章では、第1研究の方法と結果についてまとめている。調査対象者133名（留学生65名、日本人学生68名）に対し、コース前後に異文化間能力を測定する項目からなる質問紙調査を行った。分析は、まず探索的因子分析により、異文化間能力の認知面（第1因子の異文化に対する認識）・態度面（第2因子の異文化への受容的態度）・行動面（第3因子の異文化での能動的行動）の3側面にまとめ、それぞれについて2元配置分散分析を行ったところ、留学生、日本人学生ともに異文化間能力（認知面・行動面・態度面）が向上したことを報告している。

第5章では、第2研究の方法と結果についてまとめている。調査対象者43名（留学生22名、日本人学生21名）に対し、コース前後に偏見につながる心理に関する質問紙調査を行い、不安、不確実性、接近回避、自民族中心主義、それぞれのコンストラクトについて、2元配置分散分析を行った。その結果、留学生はコース終了後にすべてにおいて低下していた一方、日本人学生は、自民族中心主義については低下が見られなかったが、それ以外は低下したことを報告している。

第6章では、量的研究1、2のまとめと考察を行なっている。協働学習をデザインする際には、接触仮説の最適条件とその発展理論を念頭に組み立てることで、教育効果を高める可能性について述べられている。

第7章では、研究3の方法と結果をまとめている。留学生4名、日本人学生4名に、半構造化インタビューを行い、書き起こした語りを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）という方法で分析し、日本人学生については99、留学生については116の概

念を析出している。それぞれの変容過程について「異文化接触による心の動きと変容に向かう行動」という析出したコアカテゴリーを中心に結果図を作成した。そこでは共通性とともにも多様性も包括され、特に、グループの関係性の影響により、それぞれ多様な学びのプロセスが生じることがわかった。

さらに、留学生と日本人の結果図の比較により、参加者全体の共通点と相違点が提示された。それによると参加者は当初、自文化的行動に出るが、異文化接触によりマインドフルネスが活性化され、グループワークの中で多くの気づきを得て文化理解を促進していく。同時に異文化間コンフリクトやら葛藤を感じ、まずはデフォルトの適応方略により解決を試みるが、ワーク進行に伴い関係性も発達し、活発な相互作用による文化的影響の与え合いから変容行動への挑戦を試みていく。そして、自律的なメンバーとして役割を見出し、共通目標に向けた協働のための行動を実践し、内集団意識を高めながら、異文化間能力の発展を遂げていくことが示された。

第8章では、第3研究のまとめと考察を提示し、第9章では総合考察をしている。接触仮説の最適条件、カテゴリー化変容モデル、および不安の減少からの考察を行い、一連の集団間接触理論が異文化間能力の向上にさまざまなかたちで作用し、貢献したことが論じられている。協働をとおして、グループ独自の意味や価値観、それに基づくルールや行動規範などがメンバー間で共有されるようになり、当該コースの協働学習が再カテゴリー化を実現して、異文化間能力の向上に貢献したとの考察が述べられている。

最終の第10章で、研究の第3目的でもある、教育的示唆として以下の提案をしている。提案1：接触仮説の最適条件、カテゴリー化変容モデル、不安の減少といった一連の集団間接触理論を念頭にコースデザインを行う。特に、共通内集団アイデンティティモデルを念頭に、内集団意識が高められるような協働グループ活動を中心に据え、全体のコース内容を組み立てる。これにより、変容を支える関係性の形成、複合的なカテゴリー化の変容、マインドフルネスの活性化が実現し、全体的な教育的効果が期待できる。

提案2：日本人学生と留学生のそれぞれの自己変容過程の包括モデルの共通性と多様性、さらに両モデルを比較した際の共通性と独自性を理解し、それらの点を踏まえながら、各参加者のプロセスに寄り添い、ファシリテートを行う。これにより一人一人の参加者が変容過程のどのあたりにいるのかを見極め、各自の学びに寄り添い、適切なスキヤフォールディングが行える。

最後に研究の限界点や課題を述べ、異文化間協働学習の研究分野の理論面を開拓し、当該分野の抱える実践先行の問題に対し解決策を提示した点、明らかにされてこなかった異文化間協働学習における自己変容過程の全体像を示した点を成果として論文を結んでいる。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：八島智子、守崎誠一、嶋津百代各教授）は、西岡麻衣子氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は、1) 必要単位（10単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で 2) 論文3編（査読あり国内学会誌掲載論文1編）、3) 口頭発表2回（うち全国大会2回）を有し、4) 博士論文聴聞会（2022年11月26日）も重大な問題の指摘なく終了しており、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会（2023年1月25日開催）に報告し、同氏からの論文提出を承認する決議を得た。これを受けて2023年4月10日に西岡氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（2023年4月26日開催）において承認された論文審査委員会（主査：守崎誠一、副査：竹内 理、副査：嶋津百代各教授；学外委員：浅井亜紀子桜美林大学教授、八島智子関西大学名誉教授）での審査に入った。同時に所定の閲覧期間と手続きをもって、研究科構成専任教員への論文開示も行った。

提出された論文（178頁）は、留学生と日本人学生がともに学ぶ国際共修を対象に、集団間接触の先行理論に基づき、自らが指導者として異文化間協働学習を実施したうえで、その教育的効果について、二つの量的調査により参加者全体の変容傾向を検討し、さらに半構造化インタビューを用いた質的調査から自己変容プロセスを明らかにしたものである。

具体的には、異文化間能力と、偏見に結びつきやすい心理傾向の2つの側面から、介入前後の量的データを取り、因子分析を繰り返した上で、異文化間能力の認知面、態度面、行動面の3側面を因子として浮き彫りにした。それぞれの側面について分散分析で変化の様相を分析し、日本人学生、留学生グループとも三側面の能力を向上させたことを確認している。さらに量的研究では見えてこない、変化のプロセスを明らかにするために、質的データにより綿密に分析している。量と質を組み合わせた混合法により教育的効果の全体像を捉えようとする意欲的な研究である。量的研究は、教育的観点から対照群を作れなかったという弱点はあるものの、必要な手順を一つ一つしっかりと踏んでおり周到である。一方、質的研究の半構造化インタビュー調査については8名に対し一人1時間あたりのデータを、M-GTAの手法に従ってオープンコーディングしており、日本人と留学生のそれぞれについて100前後の数の概念を析出している。つまり、合計200枚ほどの分析ワークシートを作成し、それをもとに分析を展開し、日本人、留学生それぞれに結果図を作成しており、こちらも独立した質的研究としても十分なデータ量である。

質と量の結果を統合し、日本人と留学生それぞれのプロセスに見られる共通性と多様性、さらに日本人グループと留学生グループのプロセスの共通点と相違点を明確にしている。日本人留学生から構成される、授業内の作業グループの人間関係によって生じる社会的コンテキストの違いや進行状況の違いにも注目し、違ったグループコンテキストを代表する日本人4人、留学生4人をインタビューし、その語りを綿密に分析している。その結果、M-GTAを用いた一般化を志向して理論化するプロセスと、個人個人の目から見た多様なプロセスを丁寧に描くことを、両方見せた試みは評価に値する。特に、日本人と留学生が、相互に

影響を与えあい、それぞれが認知や行動を順応させつつ、共同プロジェクトを進めていく、その心理的プロセスが明瞭になっていくところは読みごたえがある。最後には結果を統合し、理論的基盤である接触仮説に戻り、良い影響を生む条件についての指針など、異文化間共修という実践のあり方について提言をしている。教育実践者としての興味に始まり、実践への提言に終わっており、終始、実践者としての教育改善の熱意が強く感じられる研究となっている。

上記に加え、以下の6点からも、本論文は優れているものと判断することができる。

- (1) 大学教育において異文化間の協働学習が積極的に推進されているが、実践先行の傾向にあり、理論面や教授法の開発が立ち遅れているという現状を把握し、その点を改善するという研究の意義を明確にしている。
- (2) 研究方法として量と質を組み合わせた混合法を使う意義をについて、実践的観点と哲学的観点から提示し、説得力のある論を展開している。
- (3) 異文化間コミュニケーション学、異文化間心理学、異文化間教育学にわたる幅広く、綿密な文献レビューを行っており、結果として研究の必要な領域（ギャップ）を明確に提示できている。
- (4) これまでは留学生だけを対象としたものか日本人だけを対象としたものが多い中で、両者を対象とし、その変容プロセスの共通点と相違点を見出している。ホスト側と留学生の両方の視点から見た変容のプロセスを明らかにした点で、新規性、希少性が認められる。
- (5) 接触仮説と後続の一連の理論を用いることにより、異文化間接触を伴う協働学習を通して学生が良い方向に変化するということだけでなく、どのように、どのようなプロセスを経て変容するのかについて光を当てることができている。
- (6) (5) と関連し、接触仮説と後続の理論を用いて、変化をもたらすプロセスを創設する実践のあり方や条件について説得力を持って提案できている。

なお、本論文では、研究参加者に対して十分な説明をおこない、彼らが同意のもとで参加する（あるいは辞退する）形式を採用していた。また研究のいかなる時点でも、自らの意思でデータを撤回することを参加者に許容しており、研究倫理の面からも問題がないものと考えられる。

以上により、西岡麻衣子氏の学位請求論文が、研究の方法や内容、記述の体裁や論理などすべてにおいて、本研究科の博士号に値する水準にあることを、審査委員会一同が認めた。